

氏名(本籍)	稲葉梨恵(茨城県)
学位の種類	博士(言語学)
学位記番号	博甲第5598号
学位授与年月日	平成23年3月25日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
審査研究科	人文社会科学研究科
学位論文題目	フランス語における照応形式の機能的研究

主査	筑波大学教授	DL(言語学)	青木三郎
副査	筑波大学教授	DL(文学)	増尾弘美
副査	筑波大学准教授	博士(言語学)	渡邊淳也
副査	筑波大学教授		山田博志
副査	早稲田大学教授		倉方秀憲

## 論文の内容の要旨

本論文は、フランス語における照応形式に関する事象の観察を行い、個々の機能を考察するとともに、一般化しうる特徴を明らかにしようとするものである。本論文における照応とは、先行文脈における言語表現をどのように受け直すかという問題である。照応の源となる先行文脈の言語表現を先行詞と呼び、先行詞を受け直す言語形式を照応詞と呼ぶ。本論文では先行詞となる不定名詞句(un N)の特徴を明らかにし、その照応詞である中性代名詞ça、定名詞句le N、指示代名詞句ce Nの照応機能について論じる。

本論文の構成は以下の通りである。

序章：本研究の目的と論述の手順

第1章 不定名詞句 un N の考察

第2章 照応形式の機能と意味的価値

第3章 不定名詞句 un N の総称解釈

第4章 un N の総称解釈と指示代名詞の照応機能

第5章 中性指示代名詞çaに関する記述的考察

第6章 発話内容照応におけるça/leの比較考察

終章 総括と展望

序章で本論文の目的と方法を述べた後、第1章では、不定名詞句 un N の主語位置、目的語位置における機能を考察する。不定名詞句には特定の指示解釈と非特定の指示解釈があり、その解釈の決定に関して統語的位置が関わる。主語位置は指示機能を持つ位置であり、そこに現れる un N は特定の指示解釈となりやすい。それに対して、目的語位置は属性付与機能を持つと同時に、指示機能も持ちうるので、un N の解釈には曖昧性が生じやすい。それは目的語位置の un N は、述語の性質に支配されながら主語との関係を保つという、二重の関係があるためであると主張する。

第2章では、先行詞の表現をそのまま受け直す忠実照応における定名詞句 le N と指示名詞句 ce N の意味的制約について論じる。照応詞となる le N / ce N の持つ機能と、先行詞となる不定名詞句 un N の意味的性質

が密接に関係していることを明確にする。同時に談話における発話者と共発話者の主観性とも深くかかわりがあることを明らかにする。

第3章では、不定名詞句 un N の総称的解釈をめぐる考察を行う。まず、先行研究を再検討し、不定名詞句を主語とする文（un N + SV 型の不定名詞文）が総称解釈になるための条件を示す。多数の実例観察を通じて、このタイプの総称文には、格言的総称解釈と数対比的総称解釈の2つのタイプがあると主張する。格言的総称解釈の文では、述語は個別的出来事ではなく、un N の N の「大部分」を保証する内容、すなわち例外を排除しない一般性を表わす。この場合、発話者と共発話者（および他者）との間に、N の特徴や性質に対する見解のずれを表す文脈が特徴的である。数対比的総称の解釈は、限定辞の表す対象の数の増減に比例して、述語内の名詞句が表す対象数が増減するという数量的解釈であり、格言的総称解釈とは全く異なることとなることを示す。

第4章では、un N 総称に照応する指示詞の機能について考察する。まず、先行研究において論じられている不定名詞句 un N の性質と中性代名詞 ça の機能を批判的に再検討しながら、< un N, ça + SV > における un N の振る舞いと、指示代名詞 ça の機能を中心に独自の考察を展開する。本論文では、ça の機能は、すでに一度主観的に定義された N の内容を差し戻し、後続する述語によって再定義することにあることを主張する。

第5章では、中性指示代名詞 ça に関する先行研究を検討し、この語のもつ直示的機能と照応的機能について論じる。先行研究において、直示的機能は、「発話現場連結機能」「発話者の主観性」「拡張機能」が問題となり、照応的機能では「拡張機能」「再定義機能」が論じられている。「拡張機能」については、直示的指示と照応的指示に共通する機能である。また、「再定義機能」に関しては、第2章で扱う ce N の機能、第4章で扱う総称を受け直す ça および ce の機能と共通している。すなわち、発話者が、指示対象を新たな視点を導入して叙述し直すということである。この発話者による新たな視点という意味では、「再定義機能」には、直示的指示にもあったように、「発話者の主観性」が含意されているといえる。「発話現場連結機能」に関しては、照応的指示は文脈指示であるため、発話行為現場の中に直接的な指示対象をもつわけではないが、発話現場において発話者が新たに指示対象を指示し直すという意味で発話現場と連結している。したがって直示詞 ça の機能には、第一に、「発話現場連結機能」があることを主張する。

第6章では、発話内容を受け直す中性代名詞 ça / le について比較考察を行う。この ça / le の違いは、指示対象に対する受け直し方の違いであることを論じる。発話者が動詞の直接目的補語として ça を使用するのには、指示対象となる発話内容に対する共発話者（および他者）との見解（視点）のずれを表わす場合である。発話者は ça を用いることで、指示対象を未決定（未確立）として保留あるいは差し戻し、それについての発話者の真偽判断や見解を新たに共発話者に明示する。その結果、文脈では発話内容に対する発話者の視点・態度のヴァリエーション（不満・憤慨・疑問・反駁・意外性など）が表出される。発話者が動詞の直接目的補語として le を使用するのには、指示対象となる発話内容のステータスが発話者・共発話者間で確立している場合である。そのため文脈では指示対象の発話内容に対する真偽判断や評価が行われることはなく、行為の有無の確認が問題となる。

終章は、本論文の総括と研究の展望である。照応的用法における指示詞の機能についてまとめることにより、照応的用法における指示詞の機能で重要な点は「再定義機能」であることを浮き彫りにする。また、展望では、本論文を基盤として今後進むべき研究の方向性を示す。

## 審査の結果の要旨

本論文はフランス語における照応の問題を先行詞と照応詞の両側面から詳細に考察したものである。先行

研究を批判的に検討しつつ、かつ現代フランス語の豊富な実例観察を通じて、フランス語母語話者にとっては自明な現象でも説明の困難な現象に独自の観点から分析を行い、新たな仮説を提案するに至っている。

本論文の特色は、特定の理論的モデルを援用した分析ではなく、実例を中心に、観察と記述と重ねていくことにより観察理論を構築し、解釈に理論的基盤を与えることを可能にした点にある。まず第1章では先行詞として不定名詞句に注目し、その解釈の多様性に関して考察している。これにより不定名詞句という形式自体の性質、主語位置・目的語位置という統語的性質、さらに限定される名詞自体の意味的性質との複雑な関係性に注目する。そこから不定名詞句の解釈を単に分類するだけではなく、解釈のプロセスを記述することが可能になる。不定名詞句は、その不定性により、統語的位置と名詞意味との関わりが多様になり、意味の多様性を産出することが明らかにされる。第2章・第3章では不定名詞句の特性をさらに深く考察し、総称の問題まで掘り下げている。総称解釈の問題は、一般に照応機能と関わらないと考えられており、本論文で1章を割くことには批判があるかもしれないが、それに続く第4章では、フランス語の特徴である不定名詞句 *un N* を中性代名詞 *ça* で受け直す総称文が論じられて、用意周到に第3章が組み立てられていたことに気がつくのである。本論文の最も優れた独自の主張は、第4章から第6章にある。第4章・第5章では、照応詞としての *ça* が、発話者が先行詞の内容を受け直す際に、すでに主観的に定義された内容を差し戻す効果をもつとともに、新たな述定により定義をし直すという、ダイナミックなプロセスを記述することに成功した。さらに第6章では、会話における相手の発言内容を受ける *le* と *ça* の振る舞いの相違を記述し、*ça* のもつ再定義機能という機能をより明確に論じたものであり、記述的にも理論的にも高く評価できるものである。

ただし本論文では指示代名詞 *ça* の独自の解釈を提案し、記述することに成功しているとはいえ、フランス語の *ça* の用法が持つ豊かな意味の世界を広く視野に入れた研究までには至っていない。さらに広範囲にわたって *ça* の用法を調査し、その統語的特徴の差異による分類を行えば新たな知見が生まれると予想される。また不定名詞句総称文における *ça* の理論的考察はやや牽強付会といわざるをない。記述と理論においてさらなる深まりを期待するところである。しかしながら、このような批判は本論文の価値を損なうものではなく、本論文がフランス語の照応形式に関して新たな言語事象を発見し、実例の観察を重ねながら独自の解釈を提案したことは、日本のフランス語学研究に新たな貢献をしたものとして高く評価されるものであり、今後の発展に期待を寄せるところである。

よって、著者は博士（言語学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。